

TSFで孕み系

ミヤノシノの場合



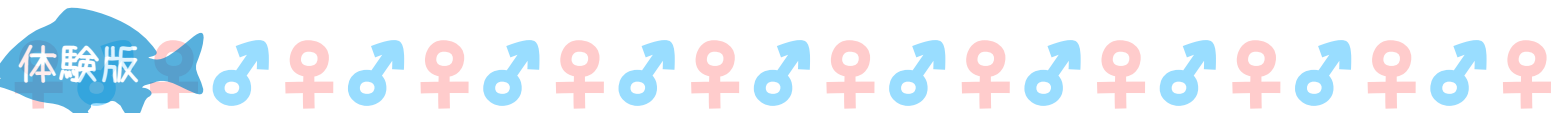
体験版 VTuber・オタ友・幸せエンド

MIYANO SHINO NO BAAI



目次

登場キャラクター	4ページ
第1章 子宮からの声	7ページ
第2章 Eゲーム	30ページ
第3章 玩具と外出	55ページ
第4章 性癖プレイ	85ページ
あとがき	109ページ
作品紹介	110ページ



登場キャラクター

■ 宮野 志乃介／紫乃（ミヤノ シノスケ／シノ）

主人公。十九歳。元男子校の演劇部員。背が低いせいで女役が多かった。ボイスチェンジャーと女キャラを使い、VTuberをしている。VTuberの名前はシーノ。リスナーから紹介されたアプリのせいで女体化する。

■ 岩村 雷太／RAITA（イワムラ ライタ／ライタ）

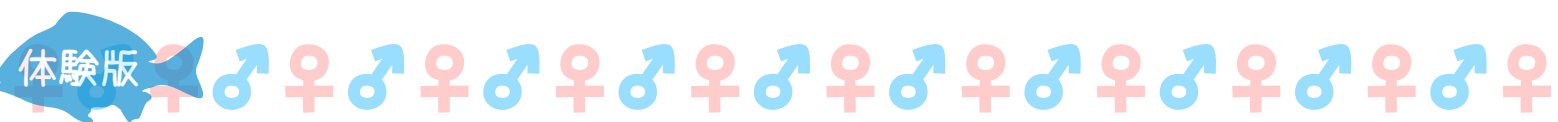
主人公の相方。十九歳。主人公と高校が同じ。元男子校の美術部員。絵を描くことと筋トレが趣味。主人公と同居中。デザイナーで、主人公のVTuberのキャラクターを作っている。またデジタルグッズを作り販売している。ITに強い。







第1章 子宮からの声



「マイクテスト、マイクテスト」

パソコンデスクに向かって座っている。モニターの前にはマイクがある。俺は今、四畳半の部屋にいる。DIYで作った配信用の防音室。壁は段ボールで覆っている。窓は潰してあり、扉も隙間を塞ぐようにスポンジを貼り付けてある。

モニターの上にあるウェブカメラに顔を向けた。俺の動きをトラッキングしている。俺が手を振れば画面の中の女性キャラクターが手を振る。俺がにっこりすれば画面の中の女の子も笑顔になる。

女性キャラクターはオリジナルで、名前はシーノだ。俺の職業はVTuber。企業には所属していない個人勢だ。最近はずっと稼げてきており、パンの耳生活から脱却しつつあった。

「そろそろ配信時間だぞ」

部屋の隅にいる長身の筋肉男が声をかけてきた。高校時代から続くオタク友達の岩村雷太だ。雷太の声は野太い。いかにも雄といった重い響きだ。この声が心地よいと思う日が来るとは思っていなかった。

「ああ、大丈夫だ。しかし、マジでやるのか？」

俺はソプラノの声を返す。女性の声、女性の体。俺、宮野紫乃は、少し前までは志乃介という男だった。しかし、いろいろあって女の外見になっている。きつ

かけは、リスナーからのメッセージだった。

——子宮から声が出ていない。

その頃、俺はまだ男で、ボイスチェンジャーを使った女声で配信をしていた。声のどこかに男臭さが残っていたのだろう。

俺と雷太は同じ男子校出身だ。俺は演劇部で、背が低かったから女役ばかりをやっていた。雷太は、美少女キャラを2Dや3Dで作っていた。二人が組めば、就職しなくてもVTuberとしてやっていけるのではないか。そう考えた俺たちは、進学も就職もせず、共同でボロい一軒家を借りて配信を開始した。

雷太が作り、俺が操るシーノというキャラは、そこそこのファンが付いたが伸び悩んだ。そんな時に送られてきたのが「子宮から声が出ていない」と指摘するメッセージだった。

俺は今、裸で椅子に座っている。手元のスマホに目を落として、書いてある内容を確かめている。

——裸で配信をする。1ポイント。

——膣にペニスを入れて配信する。3ポイント。

——配信中に中出しをする。6ポイント。

俺は、ごくりと唾を飲み込んだ。スマホに表示しているのは『Eゲーム』とい

うアプリだ。子宮の声のリスナーから紹介されてインストールしたものだ。

——このアプリを使えば、子宮から声を出せます。

半信半疑でインストールしたら肉体が変化して女になった。『Eゲーム』は俺の体を変えるだけでなく、さまざまなチャレンジを送ってきた。裸になれとか、女性器を男性に見せろとか、セックスをしろだとか。

最初は抵抗感を持っていたが、指示に従うとポイントがもらえて、1ポイントにつき1万円もらえたので従った。エッチの相手が必要な時は、雷太を使った。俺のパートナーだから協力するのは当たり前だ。今もそうだ。雷太は部屋の隅に裸で立っている。そしてペニスをはち切れんばかりに怒張させている。

「前戯はいいのか？」

雷太が俺の体を見ながら聞いてきた。

「ああ、この体、開発され切っているから濡れやすいんだよ」

自虐気味に言っ、膣に指を入れる。指先にとろりとした液が絡んで抵抗なく奥まで入った。我ながらエロい体だなあと思う。

俺は席を立てて椅子を指差す。雷太はうなずき、俺の背後に来て座った。地面から突き出る杭のようにペニスが天井に向かっていている。俺が男の時の二倍ぐらいのサイズがある。一言で言う巨根だ。俺は雷太に背を向けた状態で、両手でお

尻を広げる。割れ目が開き、てらてらと濡れた女性器が露出した。

「たっぷり濡れているな」

「お前の大きいからな。これぐらい濡れていると安心だろう」

「紫乃の肉に包まれるのは好きだ」

「好きだって？ 愛の告白かよ！」

俺はケラケラと笑う。雷太も釣られて声を出した。

「よし、これから先は黙っているよ。配信を始めるからな」

雷太はうなずく。俺は膣口を亀頭にあてがう。そして、コンドームを被せるように膣肉を使ってペニスをぴっちりと包み込んだ。

お腹の中がじわりと熱い。体の中が押し広げられて、子宮の先が亀頭に触れている。自分の肉がぬるぬると動き、肉棒をしごいている。ペニスに浮き出た血管や、亀頭の力りの形が分かる気がした。

「ふうっ」

声を漏らす。体の奥底から出た声だ。俺は今、雷太の太ももの上に座っている。互いに裸で肌が密着している。俺の細い背中と、雷太の厚い胸板が触れ合っている。そして相棒の長くて太いイチモツを体の中に入れている。

俺は試しに自分のお腹をなでてみた。さすがにペニスの形は分らない。しか

し心の目で、膣内の男性器をなでなでする。愛液がじわりと湧き出た。この状態で配信するのかと思うと、ゾクゾクして背中が震えた。

雷太が両手を俺の腰に置いてきた。より深く密着させ、抜けないようにするためだ。

時間になった。配信を始める時刻だ。体を少し前屈みにする。亀頭が子宮口をこする。思わず声が出そうになるのをこらえてマウスを手にとった。

「こんばんは、シーノだよ。みんな元気にしていたかな？ 私は元気でーす。うんっ！……」

いつものようにカメラの前でぴょんぴょん跳ねようとしたら、子宮を激しくノックした。すぐに声を抑えたので、台詞をつつかえたようにしか聞こえなかっただろう。俺は画面を見た。コメント欄にたくさんの書き込みがあった。

——子宮から声が出ている。

——子宮、尊い。

——分かります。子宮式呼吸法で声を出していますね。

大量の子宮への言及に、俺は血の気を引かせた。

「何で分かるんだよ」

マイクに入らないように小声で言う。雷太は答えない。その代わりに腰を軽く

揺すってきた。膣の中の太い棒が肉壁を叩く。手で口を押さえて声が出ないようにする。どういふつもりだ。この状態でしゃべれというのか。話せるわけがないだろう。しかし、いつまでも無言でいるわけにはいかない。俺は意を決して口を開いた。

「ごめえんねえ、急に黙り込んでしまっただけ。……ちよつとしたトラブルがあったえ」

駄目だ、ふつうにしゃべれない。ふわふわした感じの、エロい声になってしまふ。

スマホの画面に『Eゲーム』のダイアログが現れた。配信中なので音は切つてある。俺はとろんとした目で確認する。モニターに表示されているシーノも下を向いた。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『裸で配信』を達成しました。宮野紫乃は1ポイントを獲得しました！》

《コングラチュレーション！ チャレンジ『膣にペニスを入れて配信』を達成しました。宮野紫乃は3ポイントを獲得しました！》

合計4ポイント、四万円獲得。俺はボタンを押してダイアログを消す。三つあったリストが二つ減り、一つだけになった。

——配信中に中出しをする。6ポイント。

そうだった。配信中に中出しをしないとけないのだ。だから雷太は音が入らないように小さく腰を動かしているのだ。

激しい杭打ちとは違う緩慢な振動。心地よい子宮への揺さぶり。俺は頭がぼうつとなったまま配信を続ける。

「今日は何の話をしようかなあ。えーつとお、うーん、ふわっ！ えーとお、何だったかな……ううんっ！」

駄目だ。頭が働かない。自分でも何を言っているのか分からない。まともに話せていないのに、なぜかリスナーには好評のようだ。投げ銭をしている人がいつもより多い。俺の声を聞いて興奮しているようだ。

俺は下腹部に手を添える。子宮から声が出ているからなのか。リスナーが求めていたのはこれなのか。こういった声を聞きたかったのか。

画面に、雷太が作ったシーノが映っている。彼女はお腹に手を添えてゆっくりと体を揺らしている。ネットの向こうの人たちも、この画面を見ているはずだ。

俺はモニターの上にあるカメラの方を向き、にっこりと微笑んだ。

「今日は、子宮から声が出ているかな？」

——出ています、シーノさん！

——バッチリです！

——子宮からの波動を感じます！

ふうっ……。ゆっくりと呼吸しながら、体内の振動に身を任せる。

「いい、みんな。今何をしているかは内緒だよ」

数千円、数万円と投げ銭がおこなわれていく。シーノのリスナーたちは、みんな紳士のような。俺のトロ声を聞いて、いろいろと察しているはずなのに何も言わずにスルーしてくれている。

「最近、ちょっと変わったアプリを入れたんだあ。そのアプリのチャレンジをいろいろとこなしているの。今もそのチャレンジ中でえ……」

最後、声が少しうわずった。雷太が俺の腰を持ち上げてピストン運動を始めた。『Eゲーム』のチャレンジをこなすには中出しをしなければならない。さすがに動かずに射精は難しいと判断したのだろう。

俺の動きをトラッキングしているシーノが、トントンというリズムで上下に動いている。リスナーたちはこの動きの意味に気付くだろうか。俺は両手をへその下に置く。肉壁をこする動きを感じながら、カメラに向けて語りかける。

「そろそろだと思っよう」

何がそろそろなのかは言わない。3Dキャラのシーノは、にっこりと笑みを浮

かべている。リアルな俺は顔を真っ赤にして汗をかいている。雷太が俺の耳に口を寄せてきた。マイクに入らない小さな声でささやく。

「出すぞ、受け止めてくれ」

股を貫く肉棒が、大きく張り詰めているのが分かった。俺はゆっくりと息を吐いて、こくんとうなずいた。腹の奥が一気に熱くなり重たくなった。ゼリーのよな精子の塊が、ぶりぶりと音を立てながら注ぎ込まれる様子を想像する。俺は子宮口付近に溜まっていく精子の重量を感じた。

俺は太ももを閉じて、きゅっと膣口を引き締める。注がれた精液をこぼさないようにしようとする。俺は子宮口が白い液体を吸い上げる様子を想像する。今出た子種で、女の子の部屋を満たそうとする光景を妄想する。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『配信中出し』を達成しました。宮野紫乃は6ポイントを獲得しました！》

スマホの画面にチャレンジ達成のダイアログが表示された。モニターに目を移すと多数の投げ銭が送られていた。俺は感謝の印に両手を振った。中出しの瞬間、俺はどんな動きをしていたのだろう。意識を子宮に持って行かれたせいで確認できなかった。

「みんな、今日はあまりしゃべれなくてごめんね」

興奮がだいぶ落ち着いてきた。まだ、子宮の入り口には精液がたっぷり入っていて、膣にはペニスが刺さっている。しかし心は平常に戻ってきた。そう思っていたら、背後に座る雷太が、俺の胸に手を伸ばしておっぱいをもみ始めた。配信中なので、声を出して文句を言うこともできない。立ち上がって逃げ出すわけにもいかなかった。

こいつ———とっていると、『Eゲーム』の画面が変わった。リストが更新されて、新しい項目が現れていた。

———配信中に乳首責め5分。2ポイント。

———配信中にクリトリス責め5分。2ポイント。

———妊娠。100ポイント。

最後の項目を見た瞬間、膣と子宮がきゅっと縮んだのが分かった。俺が妊娠する？ お腹が膨らみ、おっぱいが大きくなる？ 子宮に3キログラムちよつとの胎児と、1キログラムほどの羊水や胎盤を入れて、ずっしりと5キログラムほどを腹に詰め込む状態になる。

背徳感と恐れで体が震えた。全身の穴が弛緩して、おしっこを少し漏らしてしまった。雷太が慌てて俺の股間を押さえて止めようとする。クリトリスと尿道が刺激されて、さらに放尿は勢いを増してしまった。

「ごめん、漏らしちゃったあ」

マイクが入っていることを忘れて声を出す。絶賛の言葉と投げ銭が大量に投下される。

「五分間、ちょっとおかしくなるね」

気を取り直してマイクに向けて声をかけた。了解のコメントが書き込まれる。俺はスマホを取り上げ、雷太に見せる。乳首とクリトリスを五分間責めるように無言で指示を出した。

背後で雷太がうなずいた。彼の目にも妊娠の100ポイントが目に入っただろう。さすがにこれは狙ってできるものでもないし、妊娠なんかしたくない。しかし、こんなチャレンジが出るということは、この体は妊娠可能なのか。何となくできないと思って中出しをしまくっていたが、今さらながら気になってきた。

「うんっ！」

股間の突起と胸の先端をいじられて声が出た。スマホを机に戻して時計を注視する。声はなるべく出さない方がいいだろう。さすがに喘ぎ声を配信し続けるのはまずいと思う。

いつもはマウスとペンを持っている雷太の指が、俺のクリトリスと乳首をこねくり回す。精液とペニスはまだ膣の中に入ったまま。雷太は背後から抱き付き、

ねちっこく責め続ける。

「……ふうっ、ふうっ……」

こらえていても甘い吐息が漏れる。これ、マイクで音を拾っているのだろうか
と思い、モニターを見た。頭がぼんやりしてコメントが読めない。どんどん書き
込まれているのは分かるが、何が書いてあるのかは分からなかった。

時計に目を移す。まだ一分しか経っていない。あと四分。声を我慢できるだろ
うかと考える。

「ひっ！」

思わず声を出して両手で口を覆った。クリトリスと乳首を同時に摘ままれた。
グミを指先で潰すように、ぎゅっ、ぎゅっと千切れそうな勢いで摘ままれる。そ
のたびに体がビクン、ビクンと電気を流されたように痙攣する。

執拗にクリトリスと乳首を潰される。痛みが刺激となって、全身の触感が研ぎ
澄まされる。

「はあ、はあ」

口を開き、よだれを垂らす。全身に汗をかいており、触れ合っている肌がぬ
るんでいる。まるでローションを塗って密着しているようだ。時計を見る。三
分が経っていた。あと二分だ。

「うんっ！」

愛撫の仕方が変わった。何度も潰されて膨らんだクリトリスと乳首が、今度は引っ張られる。乳首はともかく、クリトリスはそんなに伸びるものではない。引き延ばされるたびに、腰を動かしてついいてこうとする。しかし、膣の中には太い棒が入っているために自由に動かせない。まるで自分で膣の中をかき回しているような状態になる。

「はあんっ、はあんっ」

クリトリスが引っ張られるたびに腰をグラインドさせる。まるで騎乗位で腰を振っているように、雷太の太ももの上で何度も腰をくねらせる。ふとモニターを見る。画面の中のシーノも腰をくねらせていた。俺は顔を真っ赤にして目を逸らす。もしかして、声を漏らしながら腰を動かしている様子を、リスナーたちに見られ続けているのか。

「ひあんっ！」

雷太が背後から耳を甘噛みしてきた。膣内、乳首、クリトリス、耳を刺激されて、思わず体をびくびくさせる。

「あと一分、ラストスパートだ」

ささやき声とともに吐息が耳の穴に入ってくる。雷太は俺のクリトリスと乳首



「フィニッシュだ」

《コングラチュレーション！ チャレンジ『配信乳首責め5分』を達成しました。

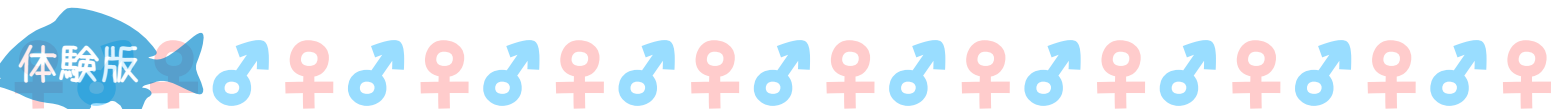
宮野紫乃は2ポイントを獲得しました！

スマホの画面に、チャレンジ達成のメッセージが表示された。雷太が俺の体を持ち上げてペニスを抜いた。ぱっくりと開いた穴に雷太は手を添え、こぼれてくるザーメンを受け止めた。しばらくそうし続けたあと手を持ち上げて、俺の口に精液を注ぎ込んできた。

「ふあへろ」

やめろと抗議したがやめてくれない。俺の舌になすり付けるように精液を口の





端を手の平でぴしゃりと叩く。

「先に掃除だろう」

「……先にしないと駄目か？」

「当たり前だろう。おしつこのにおいが取れなくなるぞ」

少し考えたあと、雷太はうな垂れた。勝手に落ち込んでいろ。俺はティッシュで股を拭いたあと、掃除道具を持ってくるために部屋を出ようとした。

——ピロンッ！

その時、通知音が鳴った。俺はスマホの画面を見る。ミュートはすでに解除してある。派手なファンファーレの音とともにメッセージが読み上げられた。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『妊娠』を達成しました。宮野紫乃は100ポイントを獲得しました！》

俺は固まった。今の射精で妊娠したのか？ いや、さすがに早すぎる。いつの中出しが原因か？ 候補が多すぎて分からない。『Eゲーム』で女になって以来、毎日何度も精液を注がれて、いつも膣内をたぶたぶの状態にしていた。

「雷太、妊娠だって」

不安な顔を相方に向ける。

「妊婦プレイができるな」

俺は雷太の腹にパンチを叩き込んで悶絶させた。

受精して着床した。俺のお腹の中に新しい生命が宿った。俺の体は、この先いつたくなるのか。

妊婦プレイ——、雷太の言葉に反応して、俺の膣は愛液を床へと滴らせた。











第2章

Eゲーム



——時間は少しさかのぼる。

高校を卒業して一年が経った。俺、宮野志乃介は街外れの格安一軒家で二人暮らしをしている。一緒に住んでいるのは友人の岩村雷太だ。二人は高校時代、オタク友達で昼休みや土日によく遊んでいた。男子校ということで、女っ気もなく馬鹿話に話を咲かせていた。

二人の部活は違った。俺は高校時代は演劇部だった。百五十センチメートル前半の俺は、背が低いせいで、いつも女役をやらされていた。化粧をして女物の服を着て、女の動きを真似る。身長が高ければと悔やんだものだが、こればかりはどうしようもない。おかげで女の振りをするのがうまくなった。

雷太は高校時代は美術部だった。美術部といっても部員は、マンガやアニメが好きな奴らばかりだ。雷太は身長百八十センチメートル越えの恵まれた体躯を持っていたが生粋のオタクだった。2Dの美少女キャラを描いたり、3Dの美麗なキャラを作ったり、そんなことばかりをしていた。

俺と雷太の共通点はオタク趣味だけではなかった。ベンチャー気質というか、世の中を舐めているというか、就職せずに独立してやろうという謎の気概を持っていた。俺たちは高校三年の時に、受験勉強や就職活動をせずアルバイトをして資金を貯めた。とはいっても、しょせん学生のアルバイトなのでたいした金は手

に入らなかった。その金で、郊外のボロい一軒家を借りて職場兼住居として事業を始めることにした。

俺たちが選んだのはV T u b e rだった。活動名は、雷太がR A I T Aで、俺がシーノだ。雷太がキャラや服や小物を作り、俺が美少女キャラクターのシーノを演じてボイスチェンジャーでしゃべる。お金は投げ銭をもらうことやデジタルグッズを販売することで稼ぐ。

最初はほとんど人が来なかった。しかし、徐々にリスナーが増えていった。何せ俺たちは時間と熱意だけは腐るほどある。食費を切り詰めて働き、今ではギリギリ黒字になりそうなどころまでファンを増やすことができた。

俺たちの城である一軒家についても話しておこう。木造二階建てで、周囲は何もない原っぱだ。道路までは土の道をしばらく歩かないと着かない。周囲には虫が多い。家主からはリフォーム自由と言われたが、実態は修理して使えということだった。俺たちは金はないが時間はあったからD I Yした。一階は台所とリビングと配信室にした。配信室については、スーパーからもらってきた段ボール箱で防音にした。二階は俺たちそれぞれの寝室にした。

その日、いつものように一階のリビングのソファで、俺と雷太は企画会議をしていた。二人の前にはテーブルがある。その上にはノートパソコンが載っている。

る。議題は、最近伸び悩んでいるリスナーをいかに増やすかというものだった。

「リスナーの意見をもっと聞くべきじゃないのか？」

俺は横に座る雷太を見上げた。

「いや、あまり聞きすぎるのもよくない。平均的で良質なコンテンツは大手がやるべきものだ。零細がやるべきなのは尖ったコンテンツだ。他にはない頭がおかしな内容を追求すべきだ。リスナーの意見を聞くにしても、参考にするだけでそのまま採用してはいけなと俺は思う」

雷太は頑固職人のような表情で言う。言わんとしていることは分かる。お行儀のよいコンテンツなんてバズることはない。唯一無二の珍味のような動画を俺たちは作るべきだ。

「それで、この意見、どう思う？」

俺は、リスナーから送られてきた一通のメッセージを画面に表示する。

—— 子宮から声が出ていない。

「何だこりゃ？」

雷太が素っ頓狂な声を出す。

「どう受け取るべきだと思う？」

俺は相棒の表情を伺う。

「うーん。志乃介は男だし、子宮から声が出ていないのは当然だろう。そもそも子宮から声なんか出ねえし」

「いや、そうなんだが。役に入り込めていないという指摘の突飛な言い回しだと考えれば妥当かもしれないと思ってな。演技に、どこか男臭さが残っているのかもしれない」

俺が所属していたのは男子校の演劇部だ。観客も基本的に男子生徒だ。だから本物の女に近いかわかどうかわ誰も分からなかった。

「実はな、このメッセージには続きがある。送信者から、子宮を理解するには体験するのが一番だと言って、アプリのURLが送られてきたんだ」

「何だそれ？ 怪しさ1000パーセントじゃねえか」

「そうなんだが。俺は敢えて地雷を踏んでみようと思う。次の配信のネタになりそうだしな」

他人がやったことのない体験は、ネットコンテンツの基本だ。

「配信中にやるのか？ スマホ、ぶっ壊れるかもしれないぞ。いちおう事前に確かめておいた方がいいんじゃないか？」

雷太は疑いの目を俺に向ける。ヤバイアプリだと思っているようだ。俺もそうじゃないかと考えている。

「なあ雷太。最悪、出荷状態に戻せばいいだろう。バックアップはきちんと取っているから問題ないよ」

「うーん、まあ、ネタ不足なのは事実だしなあ」

伸び悩んでいる時期は、何でも試してみたくなるものだ。俺はURLをスマホに送りタップした。『Eゲーム』と書いてあるウェブページが表示された。ちょっとエッチな内容だと書いてある。恋愛ゲームか何かだろう。女性視点で、女の子の気持ちを体験できるものだと思える。配信で盛り上がる内容だといったなと思った。

インストールボタンを押す。すぐにダウンロードが終わってアプリが起動した。黒背景に金文字で『Eゲーム』と書いてあるタイトル画面が表示された。

画面の中ほどにスタートボタンがある。スタートボタンの下にはアオリ文句が書いてあった。

——ポイントをとめてお金を稼ごう。

ポイ活要素もあるのか。その下には少し小さな文字で説明が書いてあった。

——このゲームを開始すると、めくるめく性愛の日々が始まります。ゲームではチャレンジが表示されます。あなたがクリアすればポイントがたまります。

うーん怪しい。まあ、いいか。俺は雷太に顔を向ける。

「とりあえずスタートしてみるぞ」

「ああ」

俺はスタートボタンを押した。その瞬間、スマホの画面から強烈な光が放出された。

リビングの家具が全て消えて真っ白になった。その場所にいるはずの雷太は見えなくなり、俺だけが白い世界で浮遊していた。ブラックホールに吸い込まれるような感覚というのだろうか。肉体が引き延ばされて変形する感覚を味わった。世界がねじれて組み変わっていく。あるいは変化しているのは世界ではなく自分の方なのかもしれない。

景色が映り込んだシャボン玉が無数に浮かび始めた。景色は自分の人生のさまざまな場面だった。その場面が次々と書き換わっていく。まったく異なる光景に一つずつ変わっていった。

閃光のような光が収まっていく。徐々に部屋の輪郭が見えてきて、いつもの家具が浮かび上がってきた。

まだ視界がはっきりしない状態が続く。何度か目を瞬くと視力が戻ってきた。俺はスマホを見る。画面にはいくつかのボタンが表示されていた。プロフィール、チャレンジリスト、ポイント、ヘルプの四つのボタン。それら以外は真っ黒な状

態だった。

「何だったんだ今の光は？」

俺は文句を言いながら横の雷太を見上げる。雷太が驚愕の顔をして俺を見下ろしている。

「お前も光に目をやられたのか？」

尋ねると口をパクパクとした。パニックになっているのか狼狽した様子を見せている。何だよいったい。まあ、いいか。俺は『Eゲーム』に目を戻す。

まずはプロフィールを確認することにした。年齢十九歳、名前は宮野紫乃、読みはミヤノシノか。性別は女性になっている。

苗字は俺の名前で、下の名前だけが違う。シノスケがシノになっている。今どきのAIならば、こうした名前を作るのは簡単だろう。年齢と名前はどうやって知ったのだろうか。端末から拾ったのか。そうした権限の確認はなかったはずだが。性別が女性なのは、女性を体験するゲームだからだろう。名前の下にはパラメーターが表示されていた。

体力40、知力65、性欲90、特殊能力「演技」。

40、65、90——これは百点満点なのだろうか。体力が低くて性欲が高い。俺はそんなに性欲があるかなあ。一つ前の画面に戻り、今度はポイントのボタン

を押す。貯めたポイントはPayPayなどの電子決済アプリのポイントに交換可能らしい。1ポイント1万円と書いてある。かなり高額だな。このポイントは、どれぐらい簡単に稼げるものなのだろうか。

「次はチャレンジリストか」

ボタンの並んだホーム画面を戻り、チャレンジリストのボタンを押す。チャレンジの内容と獲得ポイントが表示された。

—— 男に胸をもんでもらう。1ポイント。

—— 男とキスをする。2ポイント。

—— 男に膣に指を入れてもらう。5ポイント。

何だこれは？

エロゲーにしては何かおかしい。指示だけで画像も何もない。

「なあ、雷太。これ、どう思う？」

俺は隣の相棒を見上げて聞いた。まだ口をパクパクとさせている。バグったゲームのキャラみたいだ。俺は、雷太の筋肉に覆われた腹筋にパンチを入れる。ゲフツと声を上げたあと、やっとまともな表情に戻った。

「どうしたんだ、いったい？」

「志乃介、お前、女になっている」

「紫乃ってキャラ名らしいな。この『Eゲーム』では、そういう名前らしい」
「そうじゃない。お前の姿が女になっている」

「はあ？」

雷太は俺の胸に手を伸ばして、むにゅりとつかんだ。

「ひゃんっ！」

俺は思わず女のような声を上げる。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『男に胸もみ』を達成しました。宮野紫乃は1ポイントを獲得しました！》

女性声優のような声で、メッセージが読み上げられた。俺と雷太は顔を見合わせる。いったいどういうことだ。現実世界で俺の胸がもまれたことをスマホのゲームがどうやって知ったんだ。

雷太は俺の胸をつかんだままだ。俺は慌ててスマホの画面を見る。今読み上げられたメッセージがダイアログで表示されている。

ボタンを押してダイアログを閉じる。先ほどのリストから、「隣の男に胸をもんでもらう」という項目が消えた。俺はホーム画面に戻って、ポイントのボタンを押した。

1ポイント増えている。換金ボタンを押して、送金先としてPayPayを選

ぶ。Pay Payの残高が1万円増えた。

「マジか……」

生活はけっこう厳しい。これでポイントを稼げるなら無茶苦茶助かると思った。雷太は俺の胸をもんでいる。男の胸をもんで何が楽しいんだかと思い、服を引っ張り中をのぞき込む。女性のおっぱいがあった。俺は額にじわりと汗をかく。そっと股間を触ってみた。あるべきはずの場所に、あるべきものがない。どこかに鏡がないかと思って見渡して、ノートパソコンのカメラを使って自分の姿を表示した。

髪が長くなっていた。顔は少し小さくなり丸みを帯びていた。肩はなで肩になり肩幅が狭くなっている。胸は豊かに膨らんでいる。腰はくびれて尻は大きくなっていた。つい先ほどまで男だった俺の体は、どこからどう見ても女性の体に変化していた。

ピロントと音がした。チャレンジ追加の通知が表示される。タップしてチャレンジリストの画面にした。

——男とキスをする。2ポイント。

——男に膣に指を入れてもらう。5ポイント。

——男とセックスをする。10ポイント。

俺は赤面する。男って、今俺の胸をもんでいる雷太のことだよなあ。こいつとセックスをする？ いや、ない、ない、ない、ない。俺は首をぶんぶん横に振り、雷太の腕をぴしゃりと叩き、胸をもむのをやめさせた。

「えーと、現状を整理しよう」

「俺はいつでもセックスできるぞ、女のお前と」

「ちよつと待て！」

俺はソファアの位置を移動して、雷太との距離を一メートルほど空けた。雷太を警戒しながらスマホを操作してヘルプのページを見る。元に戻る方法がないか探すが見つからない。その代わり、今の状態とはまったく関係のない情報を見つけた。『Eゲーム』の「E」の意味だ。E s t r u s の省略らしい。日本語に訳すと発情期という意味になるそうだ。

「志乃介、いや紫乃。チャレンジをこなそう。キスで二万円。今の俺たちには重要な収入だ」

「ひっ」

雷太が俺の両肩に手を置いてきた。逃がさないとばかりに、がっちりつかんでいる。

「待て待て、俺は男なんかとキスはしないぞ」

「俺はできる。今のお前は女だ」

発情ゲーム。発情させるのは俺ではなく、俺の回りにいる男の方かよ！俺は腰を上げる。雷太も席を立つ。俺はじりじりと背後に逃げようとして壁にぶつか。雷太が俺を壁に固定して顔を近付けてくる。

追い詰められた。雷太の顔が間近に迫る。嫌だ。俺は口をきゅっと結んで目をつむる。

熱い息が顔にかかり、唇が重ねられた。俺は口を閉じたまま、雷太が顔を離すのを待つ。しばらく口が密着したままだった。呼吸を止めて息が苦しくなる。やっと唇が離れた。緊張を緩めて口を開く。その瞬間にふたたびキスをされた。そして、口の中に舌を入れられた。

唾液で覆われた舌がぬるりと侵入してくる。全身の力が抜けて壁に体重を預ける。雷太が俺の口の中で舌を動かす。自分の体温が上がった気がした。汗腺から汗がにじみ出た。湿り気を帯びた空気を鼻から漏らす。雷太の舌がなめくじの交尾のように俺の舌に絡んできた。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『男とキス』を達成しました。宮野紫乃は2ポイントを獲得しました！》

肩をつかんでいた手が離れた。俺はずるずると壁を滑って、その場にぺたりと

座り込む。

自分の頬が紅潮しているのが分かる。目は潤んでいるのだろう。口はだらしくなく開いていた。股の間が少し濡れていた。きつと愛液がにじみ出ているのだろう。

雷太が膝を突き、左手で俺の腰をつかんだ。そして右手を俺のパンツの中に入れてきた。太い指が俺の股間をまさぐっている。触られている感覚から、ちんちんも金玉もないのが分かった。本当に女の体になっているのだと思った。

「ひっ！」

驚いて声を上げる。指がぬるりと体内に入ってきた。体に異物が潜り込んできた感触に緊張する。

「あっ、あっ、……」

何とも形容しようがない感覚だ。肛門をうんちが通過するのとは違う。内臓がゆっくりと押し広げられるような感じだ。体験したことがない刺激。俺の膣はたつぷりと濡れていたのだろう。摩擦による抵抗はなく、雷太は指を入れたり出したりを繰り返した。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『膣に指』を達成しました。宮野紫乃は5ポイントを獲得しました！》

スマホから音声が流れる。表示されていたチャレンジはあと一つ、セックスだけだ。このまま挿入されるのか、無理矢理犯されるのかと考える。

「紫乃、どうする？ 俺はやりたい。だが、お前が駄目だと言うなら、ここで我慢する」

ものすごく悔しそうな顔をして雷太が言う。俺は視線を動かして雷太の股間を見る。盛大に膨らんで TENT を張っていた。ズボンの中でペニスがいきり立っているのが分かった。

俺は、必死にこらえる雷太を無視してスマホを操作する。ポイントのページに行き、貯まっている7ポイントを換金した。先ほどの一万円と合計して八万円が電子マネーとしてチャージされた。チャレンジをこなせばお金がもらえるのは、やはり本当のようだ。

「次のチャレンジは十万円。生活が苦しいから仕方がない。雷太とセックスがしたいわけじゃないからな。元の体に戻るまでの間、できるだけ稼いでおいた方がいいだろうと判断しただけだ。」

それに、子宮からの声ってのも気になる。雷太のスマホで録音しながらやるのは、ありじゃねえのか？」

あくまでお金と仕事のために挿入する。そうした形で提案してみた。



り、穴が押し広げられていくのが分かる。俺は口を塞がれているため鼻で呼吸する。ぴっちり閉じていた肉の壁が強制的にかき分けられていく。熱を帯びた巨根が俺の体内を蹂躪するように入ってくる。

口から手が離れた。俺は大きく口を開き、空気を取り込もうとする。腰を両手で持たれて一突きされた。肺に入れた空気が一気に吐き出される。体の奥がガツンとノックされて痛みと衝撃が響いてきた。

雷太がのしかかってきて俺の背中に手を回した。鯖折りされるように腰に抱き付かれて股間を密着される。腹と腹、胸と胸がぴったりとくっついて汗と体温を感じる。体内の異物感がすごかった。俺は、焼けた鉄棒を股間にねじ込まれている姿を想像する。

「全部入れるぞ」

「えっ？」

まだ途中だったのか。さらに深くペニスが入ってきた。

「かはっ」

子宮が胃の近くまで跳ね上げられた。肺が収縮して息がしぼり出される。

ピストン運動が始まり、ゴツン、ゴツンと膣奥を叩かれ始めた。ノックのたびに、ふいごのように口から空気が漏れる。言葉を話すことができなかった。やめ

ろと言いたいのに言うことができなかった。頭の中がチカチカする。全身に電気を流されたように感覚が伝播する。

雷太が片手を離して、俺のお尻をなでてきた。刺激に促されて膣口がきゅっとすぼまる。亀頭が膨らむのが分かった。俺の体の動きに連動して、雷太のペニスも反応するようだ。

俺は試しに、雷太の背中中に手を回してみた。たつぷりと汗をかいている皮膚の上で指を這わせた。ペニスが大きく膨らんだ。足も持ち上げて抱き付く。ペニスが甘えるように奥でふるふると震えた。俺は思わず微笑んでしまった。男の体もかわいいなと思った。

「いいよ、出しな」

耳元で言った直後に、へその下に熱の塊が放出された。ゼリー状の白い塊が次々と体内に注ぎ込まれていく。下腹部がずっしりと重くなっていく。いったいどれだけの精液を子宮の入り口にぶちまけられたのか。おちよこ一杯という量ではない。テニスボールほどの量ではないか。人間がそんな量の精液を出すことはできないのは知っている。しかし体感としては、それぐらいの量を入れられたように思えた。

射精は長く続いている。雷太は俺の体に抱き付いている。俺も雷太の体を抱き

締めている。二人で何も言わずに互いの体温を感じ続けた。

俺は体の力を緩めて、手と足を床に下ろした。雷太はまだ俺の体に取り付いたままだ。

「そろそろ抜いて離れてくれ」

俺が声をかけると雷太は首を横に振った。

「もっと堪能したい」

やれやれ。俺と雷太の身長は三十センチメートルぐらい違う。さすがに重くてきつくなってきた。俺は雷太の体を押して、どくように言う。名残惜しそうに雷太は俺から離れて、ペニスを膣から引き抜いた。

ぶぽっ、という音がした気がした。マンガのように股間から精液が溢れ出す。なんか多すぎないか？ 疑問に思ったが、頭がぼんやりとしてスルーした。俺は上半身を上げて自分の股間と床に広がった精液を見る。すごい量だ。人間の量ではない。アプリの影響だろうか。しばらくぼうっと見たあと、ふたたび仰向けになった。

「はあ、はあ」

まだ呼吸が荒い。

「雷太、ティッシュで俺の股間を拭いてくれ。あと、床の掃除も頼む」

「分かった」

雷太が立ち上がった時、ピロンツという通知音が聞こえた。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『セックス』を達成しました。宮野紫
乃は10ポイントを獲得しました！》

『Eゲーム』のチャレンジが達成された。俺はスマホを手に取り、画面を見る。
そしてチャレンジリストの画面に戻った。

——お掃除フェラをする。3ポイント。

——乳首を吸ってもらう。1ポイント。

——クリトリスを舐めてもらう。2ポイント。

セックスの項目が消えて、新しいチャレンジが表示されていた。

「雷太」

俺の股間を拭いたあと、床の掃除をしている雷太に声をかける。

「なんだ？」

「ちよつと来て、俺にちんちんを見せろ」

「改めて言われると恥ずかしいな」

雷太は俺の近くまで来て、両手を後ろに回してペニスを俺の方に向ける。まだ
完全に小さくはなっておらず、半勃ちの状態になっている。俺は上半身を上げて

床に座った。そして、雷太のペニスを手に取り、ぱくりと口にくわえた。精液と愛液が入り混じったまずい味がした。まあ、いい、これで三万円だと思いながら、雷太のペニスをしゃぶった。柔らかかった男性器が、口の中で徐々に大きくなり、ぱんぱんに膨らんだ。俺は口を離して、不満げな顔を雷太に向けた。

「何で立たせるんだよ」

「いや、お前がフェラをしたからだろうが」

雷太がツツコミを入れる。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『お掃除フェラ』を達成しました。宮

野紫乃は3ポイントを獲得しました！》

「これで、三万円ゲット！」

俺はスマホの画面を見せる。

「リストって、あれで終わりじゃねえのかよ」

「ああ、どんどん追加されるようだな」

俺と雷太は顔を見合わせる。

「志乃介、いや紫乃か。お前の容姿、めちゃくちゃ俺のストライクゾーンだ」

「ロリコンかよ」

自分より遥かに小さな相手に欲情する異常性欲者め。俺は心の中でツツコミを

入れる。雷太は膝を突き、裸で土下座してきた。

「セックスさせてください」

恥も外聞もないおねだりだ。俺は大きいため息を吐いたあと立ち上がる。

「とりあえず、この体がいつまで使えるか分からないから稼ぎまкруうぜ！」

雷太は嬉しそうに顔を上げた。

俺と雷太は発情していた。『Eゲーム』のチャレンジを言い訳にして、やりたい気分になっていた。

「寝室に行くか？」

雷太が尋ねてきた。

「そうだな。雷太の部屋にしよう。俺の部屋が汚れるのは嫌だしな」

「分かった」

歩きだそうとして、俺はカクンと膝が曲がり、その場にへたり込んだ。股の間に、まだ何か入っている気がする。巨根でたくさん突かれたせいで腰が抜けてしまったのかもしれない。

雷太が俺の体を抱えて、お姫様抱っこの状態にしてきた。

「俺が運ぶ」

恥ずかしそうに雷太は言う。

「彼女ができたら、そんな感じで運びたかったのか？」
俺は雷太をからかう。

「そうだよ。——そして今は、お前が俺の恋人だ」

雷太は顔を真っ赤にして言う。そして俺を抱えて二階の寝室に向かった。







第3章

玩具と外出

